

研究支援報告

研究課題名：中等国語科指導実践を甲斐利恵子先生に学ぶ

研究代表者：広島文教大学 岡 利道・猪川優子

甲斐利恵子先生講演会 ～私の国語学習室～

日 時 2020年1月24日（金）16:30～18:30（時間には質疑・応答分も含む）

会 場 広島文教大学教育学部棟121教室

主 催 広島文教大学教育学会

概 要

当日は金曜日の午後4時半からという時間設定でしたが、それにもかかわらず教育現場から駆けつけてくださった先生方を含め、30名を超える聴講者がありました。始まるや否や、その誰もが甲斐先生の柔らかな口調に引き込まれ、あっという間に時間が経っていたように感じられました。

講演会開催の主旨は、変革のこの時期、長年に渡り国語科教育の実践研究を精力的に行ってきた甲斐先生をお迎えし、今後の指導のあるべき姿をご教示いただくということでした。

甲斐先生は福岡県のご出身で、学生時代から大村はま国語教室に学び続けてこられました。現在は東京都港区立赤坂中学校教諭としてご多忙な毎日を送られています。国語科単元学習を専門として実践研究をお続けになられ、光村図書中学校『国語』教科書編集委員としてもご活躍中です。以下、講演の一端をお伝えし、報告とさせていただきます。

講演会のポスター、甲斐先生の当日の写真は次のとおりです。

講演会のご要約

【図説】

1 国語科の授業、長年に渡り国語科教育の実践研究を精力的に行ってきた甲斐利恵子先生をお迎えし、今後の指導のあるべき姿をご教示いただきます。

甲斐先生プロフィール

福岡県のご出身。学生時代から大村はま国語教室に学び続けてこられました。現在は東京都港区立赤坂中学校教諭としてご多忙な毎日を送られています。国語科単元学習を専門として実践研究をお続けになられ、光村図書中学校『国語』教科書編集委員としてもご活躍中です。

お申し込み先

広島文教大学 岡 利道
e: okado@hiroshima-u.ac.jp
お申し込み・お申し込み・お申し込みをのぞいてください。
お申し込み・お申し込み・お申し込みをのぞいてください。
お申し込み・お申し込み・お申し込みをのぞいてください。



偉大さがわかってきます。現場で子どもが見えれば見えるほど、大村先生は遠くへ行かれる。そういう存在をもって師匠と呼んでいいんじゃないでしょうか。

だから、大村先生が私のことを指導したってことは殆どありません。私が勝手に大村先生の追っかけをやってまして、どこに行っても大村のいるところあのなんか訳のわかんない女の子がいるっていう。ともかくもうこの人の全てを自分のものに受け入れたい、体の中に入れたいと思いながらひたすら追っかけをしました。

で、ある時、大村先生の教室で授業があるって時に、若い先生のことを教室に入れないという指示がありまして、これはどっかにも書いたのでご存じの方ももしかしたらいらっしゃるかもしれないかもしれませんけど。大村先生は自分のためにならない人を教室に入れないってことを徹底したお考えの方です。ちょっと友だちにはなりたくないなってその時思ったんですけども。もう師匠ですからハイっていう感じだったんですけども。向こうは知らないんですよ。でも、どうしても大村先生の息遣いとかいうことが知りたくて、その当時日本国語教育学会の会長をなさっていた倉澤栄吉っていう先生に、「先生、大村先生の教室に行かせていただけないでしょうか。」って頼んだら、「そんなに行きたいの。力のない人は入れないんだよ。」と。「力がないから行かせてください。お願いします。」って、無理にお願いしました。そしたら、倉澤先生と、湊吉正先生が私の指導教官だったので、その湊先生と倉澤先生で大村先生に、「大村さん、すまないけれども、若い女の子なんだけれども、入ってもいいかな。この子がいるって思わないでくれる。」って言ったんですね。そしたら、大村先生、「どうしてかしら。でも、倉澤先生がそ

こまで言ってくださるんだったら。」って言って、連れてってもらったのが最初でした。

大村はま先生は、大村はま実践国語の会っていう大会を一年に一回やっておられて、膨大な資料ですね。もう、一つの単元で、生徒に配る実践の東がこんなになっちゃうっていう、一人がですよ。そういう単元をなすってたんです。その資料作りを子どもたちに手伝わせたりすることを全然やっておられず、とにかく自分でやる、あるいは、青国研の仲間で作るって決まってたんです。「その資料作りにこの子使ってください。」倉澤先生の意図としては、「舞台裏を見てこい。」ということだったと思うんですけども。教室に入らないまでも、大村先生が仕事をしている図書準備室に行って仕事を手伝いなさいって言っていただきました。

で、私は手伝いに行くんですけども、大村先生はもう晩年というか、実践者としての晩年の時期でした。校長先生とかが、大村先生を少しちょっと敬遠していて、大村関係者が学校に来ることを嫌がってた時期でした。なので、私は、石川台中学校に行くと、靴を脱いだものをちゃんと袋の中に入れて、来たってことがわかんない、校長の来ない時間帯に行ってですね、黙って図書準備室に行ってですね、そして何千枚という資料をひたすら一日中刷り続ける。そして、大村先生がいても、「おはようございます。」とも一言も言わない。それは、いないものと思ってくださいと言われた。そのことを実践するってことは、つまり大村先生に何も話しかけない。大村先生も徹底して、「手伝ってくれて、ご苦労様。」の一言もありません。

それを朝から晩まで一週間通してやり続けるっていう任務につきました。毎日毎日埼玉の家から東京の石川台中学校に通って、そして、朝行くと、これとこれとこれを一冊、何枚と書

いてある紙を見て、黙々と働き続け、大村先生が授業の合間に図書準備室に帰ってくる度にどきっとして、でも、何も言わずに黙々とやり続け、そういう学生でした。とにかく、追っかけるってことに徹してたわけですね。

そして、国語教育の実践大会が行われた時には、その会場には、お歴々の方々いっぱいいらっしゃる中で、若いもんがはじの方で、話を聞きたい、授業を見たいってということで、見させていだいたりしていました。ですので、直接の話とかはしておりませんし、それから、倉澤先生が東京教育大の内留生、現場の先生たちを連れて月一回行かれる会にも連れて行っていただいて、「いないものと思ってください。」という立場で参加しておりました。

その時に、私が描いていた大村はまっっていうのは、すごい先生で、素晴らしい先生で、もう神様みたいな人って思ってた、どんなことをおっしゃるのかなあって見に行ったら、授業が始まる時、子どもたちが走ってきます。図書室に走ってくるんです。授業にあんなに生き生きと、授業するぞと走ってくるって、自分が現場に出てからそういうことありませんけれども。子どもたちが走ってきて、すぐ、ノートやあれを開いて、作業を始めます。その作業を始めて、チャイムが鳴っても、大村先生は一言、小さな声で、「始めましょ。」って言って始まるんです。そして、授業中、大村先生の声は一言も聞こえないです。「大村先生、どこにいるのかな。」と思って、立ち上がってこうやって見てると、「座れ。」とか言われて。倉澤先生に、「座れ。」って言われて。「そうか。」と思って、「つまんないな。なんだ、どうしてこんな先生が素晴らしいんだろう。」っていうのが一番最初の感想です。

いくら見ても、何回見ても、そのよさがわからなかった。それで、ほんやりしていたら、小

さな紙が回ってきて、倉澤先生の字で、「どこを見ている。子どもを見よ。」っていう紙がきました。「えっ。」と思って、そうか、先生を追っかけるのではなくて、子どもを見るのかと思って、子どもを見たんですね。そしたら、子どもを見たら、子どもは黙々と仕事をしているんです。作業してるんです。そいで、「大村先生が見えた。」と思ったら、小さな声で、囁くようにその子と話をして、そしてその子がまた黙々と作業する。見てて、こんなつまんない授業ないですね。何も。

その時、思っただけです。今の私に、生身の大村はまから何も学べない。こんなに本を読み、講演会を聞き、いっぱい何度も本を読んで、ノートも取って、様々に勉強してきた私には、今、大村はまから学ぶことは何一つできないんだ、と覚悟を決めました。現場に出てから、子どもたちの姿を見てから、もう一度生身の先生から教われたらいいなと、ふと思って、そして、もう生身の先生にくっつくことはやめました。自分の実践を充実させて、大村先生の書籍から学んだことを、とにかく現場でやってみて、そしてそのことを学んでから、大村先生に教えていただこうと、心に決めたんですね。

だから、私は、大村先生のお手伝いをして、その後子どもたちがいなくなって、これでもう最後の日って時に、大村先生が一言こう言いました。「頑張るわねっ。強い子ね。」とおっしゃったんですね。そうか、見てたのか。いないと思ってくださいっていうことを徹底してやり続け、そして、「あなたは、本当に頑張る子よ。」と一言、言ってくださったんですね。もう、それで十分でした。

それで、私は何をしたかっていうと、先生は青国研の人ですし、今青国研の責任者っていうか、安居先生が会長ですけども、事務局をやっ

てるので、私の学校で研究会をやっています。で、その流れからすると、弟子みたいに言うてくださる人もいますし、直接大村先生から教わったと思ってくださる人もすごく多いんですけども、私は何も教わったことはないんです、直接。

一回だけ、青国研という勉強会にいらして、一言皆さんに、私にじゃなくて、皆さんに言った言葉は、「勉強にくるのに、行こうかなあ、行くのやめようかな、そういうことを思うものではありません。勉強会は必ず行くものです。学校に行くか行かないか迷わないでしょう？ 勉強するって、そういうことですよ。」と、一言おっしゃいました。それが、自分をずっと支えています。勉強する、学び続ける、教師であることが、如何に国語教室を魅力的にするのかということを、その一言で言われたんだと思います。

大村先生は、そういうふうにして、私の師匠としてあり続けています。なので、大村先生から、直接教わったことは、ほんのそれだけです。島根国語懇話会で一緒した時も、隣にいらしても、口をきいたことがありません。私は、何度その研究会をやった後も、大村先生が倉澤先生にご馳走したくて、お世話になったお礼に言って、すごい美味しい懷石料理の店に、大村先生をご招待なさいました。その時に、「あなたも、いらっしゃい。」って言われて、「ああ〜。」とかと思いながら、タクシーで隣に大村はまがいて、大村はまと触れ合ったりしているわけです。でも、私は一言も、もう何も私が生身からは教わることはできないのに、話しかける資格はないと思い続けている、頑なな自分がいて、一言も口をききませんでした。

だから、こんなにまで身近にいるのに、その人から教わるチャンスがあったにもかかわらず、教わらないっていうことを通していました。で、

先生から離れた時に、私は何時も「大村はこの時どうするだろうか。大村はこういう時、きつこうするだろう。」と思いながら、実践を何十年もしてきたという、そういう経緯です。だから、よく、「弟子だよね。」とか、「よく教わったんだよね。」って言われるんですけど、そういうことじゃないんです。ただ、私を形作っているのは、大村はまの考え方に追いつこうと思っている自分です。だから、全然オリジナルなことなんて、多分、「掘り起こしてみると、全て大村。」ではないかと思います。

でも、大村先生が言ってたように…、「自分というものが教室を作る限り、教室は、全て違う教室です。」っていうことを仰っていました。だから、私が大村はまになろうと思ったことは間違いで、大村はまのように、自分の教室を作る人になろう、と思わなきゃいけないっていうふうにして、ここまできたって、その成果がこれだけかかっていうことになるかもしれませんけど、そういう私の国語教室を皆さんにお伝えしようと思って、今日はやってきました。

自分の中に師匠がいるってことが、如何に幸せなことか、皆さんに伝わるといいなと思っています。憧れたら、とことんその人について行く。そういう思いが、何か人を勇気づけたりなんかするんじゃないでしょうかね。その人を追い越せない自分というのが、自分を励ましたり叱ったりするっていう、なんかその超えられないって神と崇めることじゃない、その人をいつも追いつけたらいいという思いがですね、なんか自分を支えてきたように思います。もし皆さんの心の中に憧れの先生がいたら、是非その人についてってもらいたいって思います。追っかけて、いいこといっぱいありますよ。なので、そういうことで、やっていけたらいいなと思っています。

◇◇◇◇◇◇◆◆◇◇◇◇◇◇◆◆◇◇◇◇◇◇◆◆◇◇◇◇◇◇

この後は、当日配付資料（後掲・抄）をもとにして、ご著書の内容や日頃の実践について、学生会員にも分かりやすいように、具体的に国語学習室運営についてお話いただきました。

講演会の企画・運営をした立場から、一言申し添えさせていただきます。上述の如く、学生・院生時代からの回想を中心として、大村はま氏に私淑されたことを振り返り、甲斐氏にとって大村はま氏の存在とはどのような意味が

あったのかを再確認されたのだと受け止めました。一人の国語教師が、理想とする先輩教師を心に持つということが如何に意義深いことであるか、ひしひしと伝わってきます。それは、同時に、その時に参加していた学生たちへのメッセージであり、エールでもあると考えます。憧れの気持ちを抱くという尊い営み。いつまでも大切にしたいと思います。甲斐先生、本当にありがとうございました。

当日資料 (抄)

1. 国語教室経営に関するQ&A



1 国語教師とは
国語教師として基本的にどのような心構えが必要でしょうか？

A いくつも答えが浮かんできますが、次の三つを挙げたいと思います。

- ①子供の姿を知ろうとする心構え。
- ②言葉の力を育てることが仕事だという心構え。
- ③子供たちが「～たい」と思う授業をつくっていくという心構え。

国語の教師であるならば、文学のことをきちんと研究してきた人、国語学に造詣の深い人、古典がスラスラと読める人、論理的な文章を書ける人など、専門的な知識や力を豊富にもっている人が立派な教師というイメージがあります。
確かに専門的な知識や力はあったほうがいいと思いますが、それ以上に、大切なこととして上の三つを挙げました。今、専門的な力がないからといって、自信をなくすことはありません。大丈夫。子供たちと一緒に学んでいけばいいのです。



3R-S 国語教室づくり 中学校
『国語授業づくりの基礎』基本4
一歩一歩に力をつけていく国語教室づくり

「私の国語学習室」

東京都港区立赤坂中学校 甲斐利恵子
R2・1・24 (広島文教大学)

①子供の姿を知ろうとする
「教室をいきいきと」(人材はま、筑摩書房 p.20) の本文冒頭にはその言葉があります。
子どもを知るということ、子ども自身より深く知ること、親を越えて子どもを知るということ、それがまず教師として第一の目標でしょう。子どもを愛するに、子どもを信頼するに、第一に知る必要があります。それは知るということに共通していることだと思います。
子供を知ることとは大切なだけでなく、教師であるならば職能として必要です。しなやかな子供を自分自身より深く知ることができなければ、まして、親を越えて子供を知ることができず、子供を愛することもできません。けれど、「知る」という言葉は、「育てる」とは違うという点のことかと考えたいとき、まさに核心をついていると思います。
人を育てる上で大事なことは、その子供のことをよく理解してあげることです。それはただ単に、思いやりのある優しい子だということや、パターン化された捉え方ではありません。自分の知らないことに出会ったときにどう感じ、その後どう思うか、行動に移そうとするのか、難しい課題があるときにどんなふうに感じ、考え、どんなふうに向き合うのか、友達と目標を共有し、取り組むときはどんなふうにコミュニケーションをとろうとするのかなど、それをパターン化できない細かな心の動きまでも捉える理解の仕方です。
そういうふうに、子供の心の流れや、考え方の傾向、行動の行く先までも理解することによって、その子の学びをどうつなげていくか見えてきます。つまり、どんな教師で、どんな生きか、どんな言葉かけをするかはその子供たちが育つのが見えてくるのです。もちろん、そんなことが初め

言葉の小劇場

空気を満たす

僕はこの春大学を卒業し、この会社に入社した。就職が決まった時の嬉しさが入社式でもよみがえり、同期が入社した仲間たちと気軽に話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。僕が話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。僕が話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。

言葉の小劇場

花曇り

桜の花が満開になり、大好きなじいちゃんとお花見しようと思つて楽しみにしていた。じいちゃんも陽気な人で話していると心が晴れ晴れする。ところが、雨の降ってきた。じいちゃんも、さういふ。雨の降ってきた。じいちゃんも、さういふ。雨の降ってきた。じいちゃんも、さういふ。

言葉の小劇場

空気を満たす

僕はこの春大学を卒業し、この会社に入社した。就職が決まった時の嬉しさが入社式でもよみがえり、同期が入社した仲間たちと気軽に話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。僕が話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。僕が話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。

言葉の小劇場

花曇り

桜の花が満開になり、大好きなじいちゃんとお花見しようと思つて楽しみにしていた。じいちゃんも陽気な人で話していると心が晴れ晴れする。ところが、雨の降ってきた。じいちゃんも、さういふ。雨の降ってきた。じいちゃんも、さういふ。

花曇り

桜の花が満開になり、大好きなじいちゃんとお花見しようと思つて楽しみにしていた。じいちゃんも陽気な人で話していると心が晴れ晴れする。ところが、雨の降ってきた。じいちゃんも、さういふ。雨の降ってきた。じいちゃんも、さういふ。

空気を満たす

僕はこの春大学を卒業し、この会社に入社した。就職が決まった時の嬉しさが入社式でもよみがえり、同期が入社した仲間たちと気軽に話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。僕が話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。僕が話しかけた。が、反応が少なかった。空気を満たす。

